

## 令和4年度(2022年度)事業報告書

2021年10月1日から2022年9月30日まで

特定非営利活動法人 アジア失明予防の会

今年度の技術支援事業および治療支援事業について、ベトナムでは2021年12月末までゼロコロナ政策がとられており、この政策のもと5K(マスク、消毒、間隔確保、大勢で集まらない、医療申告)と厳しく制限しているものの、同年11月にはハノイでも数万人規模の感染者が発生したことから、当局の厳しい取締りにより、ハノイ医科大学、日本国際眼科病院、フエ眼科病院などでの医療技術指導に限られることになった。とりわけ、新たに103軍病院から内視鏡を用いた網膜手術の指導をしてほしいとの要望があった。すでにその担当医師は国立眼科病院で私の弟子に網膜手術を指導されてきたが、本格的な指導は当該弟子の言により、ドクターハットリから習うと良いとの助言があったこともあり、服部医師が当該病院については来年度より指導することとなった。

それまで隔離が3週間から4週間だったのが、2021年12月より2週間に短縮され、また飛行機で移動することも許されたため、とりあえず12月に渡航した。2022年1月からは、2月1日のテト(旧正月)を迎え、多くの帰国者が予想されることから、陰性証明がある場合には3日間の自主隔離だけとなった。ハノイにいるスタッフもワクチン接種を3回行っていたものの、検査キットで陽性となったが、日本から持っていた風邪薬で3日ほどで症状が和らぎ、6日目で陰性となった。一方、日本に帰国時には陰性証明、空港での検査、そして公共交通機関の利用不可で家族に成田空港まで迎えに来てもらい、2週間の自宅隔離を強いられた。ベトナムでは3月15日より、症状がなければ陽性者でも働いてよいこととなり、また濃厚接触者という定義がなくなった。ベトナムへはワクチン証明も陰性証明も必要でなく入国できるようになり、少し様子を見ていたが特に感染者の増加などはなく、5月に再度入国することにした。状況が大きく変わったため、地方での治療支援プロジェクトも行えると思いき、6月12日から予定をしていた。ところが、これまでは現地の人民委員会の委員長がOKのサインを出せば、医療保健局や病院の院長などが動いてくれたが、大きく法改正があり、今年からPACCOMのライセンスがないとボランティア活動でさえできないこととなった。早速現地スタッフに尋ねたところ1月より書類を出しているが、なかなか返事が来ないとのことであったことから、すぐに電話連絡するように指示したところ、ようやく我々の申請手続きが開始された感じで、訂正箇所のみやりとりだけで2週間たっとなつてしまい、クアンニン省で予定していたプロジェクトについては、結局行うことができなかった。一方、フエ眼科病院ではそうした書類が必要ないために、約20名の方に無償支援プロジェクトによる手術を行った。6月中にライセンスが取れるとのことであったが、まずは外務省からの許可が必要とのことで、こちらは私の知人をお願いして、すぐに認証してもらったが、つぎの作業としてプロジェクト実施予定先にPACCOMより依頼書を出して、すべての関係省から承認が得られればライセンスが取得できるということであった。しかしながらPACCOMの作業はあまりにも緩慢であり、1か月待っても返事が来ない省があり、当該省には再度依頼書を出すといった、あまりにも冗長な事務手続きを行っているということが7月半ばにわかり、それはどこの省なのかと尋ねると、ニトアン省とティンクアン省であるといわれ、過去に何度もプロジェクトを実施しているところなのにどうして??? ともお役所仕事の残念であった。こちらでもコロナ禍で担当者などが変わり、私たちがプロジェクトを行っているときに関わっていた人民委員会のスタッフが残っていれば、すぐに返事がくるのに、そうでない場合にはAPBAって何? から始まり、PACCOMからは返事を待つしかないとのことで、8月12日から予定していたダラットでのプロジェクトもとん挫してしまつた。現在返事のこない省ではプロジェクトを行わないことを条件として、何とかライセンス取得を交渉中であり、9月には、ライセンスの取得ができるのではないかと考えている。

このコロナ禍でプロジェクトが行えたのは、Hung医師が代わりに団長として行ってくれた2か所(ビンフック省とダックラク省)だけであり、購入したり寄贈していただいた眼内レンズなどの期限が次々にせまってきたが、ちょうど地方では眼内レンズが手にはいらぬとのことであったので、無償のプロジェクトに使うという趣旨を遵守するとの宣誓書を提出していただいた省には、それぞれ期限に応じて無償で提供することにした。

物資支援事業について、まず昨年度ホーチミン総領事館をお願いしていたカマウ省へのSGAは予定通り実施していただいた。また2020年の9月にお会いした駐ベトナムの山田大使をお願いしていたカマウ省のプロジェクトは、大使館の担当書記官がコロナ禍のために地方に行くことができないこともあって、しばらく様子を見ていたところ、手違いから、現地のアイセンターと総合病院の眼科のどちらから要望が出ていたかが分からなかったことや機器に必要な半導体不足のこともあり、段取り悪く、未だに機器の設置ができていない状況である。山田大使からはいつでもどうぞと逆に催促されている状況である。

宣伝広告事業について、2022年2月終わりから3月末にかけて、クラウドファンディングを活用した資金集めを行った。しかし、ちょうどウクライナ戦争が勃発した時と重なり、どうなるのかはらはらしていたが、石橋事務局長の知的な戦略や頑張りもあり400万円近くのお金が集まった(14%の手数料や税金を含む)。また服部医師がZOOMで講演活動を行ったり、助成金や寄付金などを申し出ただけの企業を探したり、NGOや公的機関に助成金申請を積極的に行っている。このコロナ禍でも、ソーシャルディスタンスを守り、ZOOMなどを活用しながら、企業グループの勉強会などや理事の方々には法人会員を新たに10社増えることを目標としていたが、服部医師がたまたまラウンジでお声掛けをしていただいた医療器械販売会社の社長と交渉して法人会員として協力してもらえることになった。

☆受賞報告:第64回のRamon Magsaysay賞の受賞者の発表が8月31日に行われ、当会の服部匡志医師が選ばれた。このニュースはyahoo newsでも流れ、NHKでも6時のニュースではトップニュースに取り上げられ、翌月の9月1日には色々な朝刊紙の紙面を賑わすこととなった。NHK WORLDで特集が組まれ世界に発信され、他社からも取材依頼が殺到している。2022年11月30日にマニラにてセレモニーが行われる予定である。この賞はWikipediaによると、アジアにおけるノーベル賞とも言われ、色々な分野から選ばれ、過去にマザーテレサやダライラマ14世などの著名人らが受賞している。日本人でアフガニスタンで活動していた中村哲さんなど。日本人では2017年の石澤良昭氏以来の受賞となる。

2022年度事業報告書

2021年10月1日から2022年9月30日まで  
 特定非営利活動法人 アジア失明予防の会

2 事業の実施に関する事項  
 (1) 特定非営利活動に係る事業

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者の人数	受益対象者の範囲及び人数	予算書 (千円)	支出見込み額 (千円)
医療技術指導①	眼科医療技術の教育・指導・普及や医療技術スタッフの派遣	年度内3回 37日 2021年10月～ 2022年9月	◎ベトナム ハノイ市（ハノイ医科大学付属病院、日本国際眼科病院）  ◎ベトナム-ダックラック省・ビンフック省 その他のベトナムの地方での支援はCOVID-19の感染の拡大のため中止  ◎ラオス-ビエンチャン・サバナケート・ルアンパバール地方病院などで網膜硝子体手術および超音波白内障手術とその指導・教育→これまでラオスを担当していた栗原医師が開業したため、来期以降に延期  ミャンマー・ラオスでの支援はCOVID-19の感染の拡大のため延期	7名	ベトナムの看護師など医療スタッフ	5551	6,878
医療技術指導②	アジア諸国と日本の眼科医療従事者の技術・情報交流の促進	年度内0回	東南アジアにおけるCOVID-19の感染の拡大のため延期	0名	該当者なし	0	0
治療支援①	貧困により目の治療ができない人々への治療の斡旋・支援や眼科検診などの啓発活動	年度内3回 275名	◎ベトナム ハノイ市・フエ市・ハイフォン市 ダックラック省・ビンフック省 ◎ラオスはCOVID-19の感染の拡大のため延期 ◎ミャンマーは2021年の軍事政権に変わり厳戒令がでているためと、COVID-19の感染の拡大のため延期	10名	ベトナムの貧困層の人々	8642	4,375
治療支援②	アジア諸国の眼科患者の日本での治療の斡旋、支援	年度内0回	東南アジアおよび日本国内でのCOVID-19の感染の拡大のため延期	1名		0	0
物資援助	眼科医療資機材などの提供	年度内4回	ベトナム		ベトナム国内の地方の医療センター	5240	2,944
広報活動	ホームページ・DVD/レター・企業訪問・講演会やFBによるPR活動・チャリティーパーティーなど	随時公開	日本国内	4名	広く一般に	2300	3,100